

ろう者研究の倫理：異文化理解のための四つのマナー

亀井 伸孝（関西学院大学社会学研究科・COE特任助教授）

■はじめに

近年、ろう者（手話を話す耳の聞こえない人たち）に対し、異文化理解の姿勢が求められていると言われている⁽¹⁾。これは、ろう者のとらえ方が「耳が聞こえない個人」という細分化されたイメージから「手話を話す言語集団」という集合的イメージへと転換されつつあることにともなって生まれた、新しい倫理であり研究領域である。

この小論では、「ろう者に対する異文化理解」なるものがどのような特性をもつのかを、ひとつの寓話と私の限られた調査経験から示したい。なお、筆者は手話学習・使用歴約10年の聴者（耳の聞こえる人）であり、また西・中部アフリカ5カ国でろう者コミュニティの手話言語、文化、歴史に関するフィールドワークを行ってきた人類学者でもある⁽²⁾。これは、手話との出会いの中でさまざまな失敗を重ねて学習した一人の聴者から、多くの聴者の読者に向けたメッセージという性格をもっている。

■手話言語とろう者の文化

はじめに用語の定義をしておきたい。世界各地の耳の聞こえない人びとの集まりが、手や顔の表情を用いた視覚的な言語を話していることが知られている。これら視覚的な諸言語を「手話言語（手話）」と総称し、手話言語を話す耳の聞こえない人たちを「ろう者」と呼ぶ。一方、音声を用いた諸言語を「音声言語」と総称し、音声言語で話す耳が聞こえる人たちを「聴者（健聴者）」と呼ぶ。

言語学的研究の中で、手話が音声言語とは異なる文法をそなえた自然言語であること、世界には100種類以上もの多様な手話言語が分布していること、それらがろう者たちの間で世代間伝承されていることなどが知られるようになった。それに伴い、ろう者学（Deaf studies）やろう者に関する文化人類学的研究などが進められ、ろう者たちの集まり（ろう者コミュニティ）ではさまざまな文化要素、たとえば慣習、価値観、物語、歴史観、アイデンティティなどが共有されていること、これらの文化要素が相互に結びついて文化複合（ろう文化）が形成されていること、それらがさらにろう者の世代間で伝承されていることなどが知られるようになった。このようならう者の文化が、地域や時代により異なっていることも近年では注目されている⁽³⁾。このような認識に基づくならば、聴者がろう者について理解するにあたって異文化理解の要素が欠かせないことは明らかであろう。

ここで、一つの問題を提示したい。聴者がろう者の文化を学び理解を深めるためには、音声言語の世界における通常の異文化理解の姿勢をそのまま適用するので十分だろうか。それとも、別の新しい方法と倫理が求められているのだろうか。結論から言えば、そこにはこれまでの異文化理解とは異なる課題があるため、独特の工夫が必要であることを本論では述べることになる。

■テレパシーの国の音声話者たち

冒頭からたとえ話で恐縮だが、こんな世界に暮らすことを想像していただきたい⁽⁴⁾。私たちは音声言語を話し、それを自然なこととして暮らす地球の人びと。ところがある日、テレパシーで会話する宇宙人たちがどやどやと現れ、地球を占拠してしまった。人口の99%以上をテレパシーの人たちが占め、町中の会話はほとんどがテレパシーのみとなり、音声で話す人びとは社会のマイノリティとなる。

問題は重層的である。まず、地球人にとってテレパシーは理解できないことばである。さらに、それは身体の機能から考えても身につけようがないことばである。この努力しても理解できるようにならない異質な言語に囲まれて暮らす状況が、一生続くことになる。

コミュニケーションの断絶に加えてさらに深刻なのは、音声に関する誤解がはびこっていることである。音声に言語の構造があることすら、宇宙人たちには認識されていない。言語学の教科書にも音声言語のことは記述されておらず、「音声はけものの遠吠えを思わせる美しさがある」などの的外れなことが書かれている本もある。「音声はみっともない」「人前で声を出すな」と、頭から否定する人もいる。

こうした誤解の中、音声話者はテレパシーの言語を訓練したり、その会話に合わせたりすることが強く期待されている。しかし訓練を受けても理解できるようにはならないので、状況から推測したり、分かったふりをしてやりすごしたりすることも多い。テレパシーはできないと言っているのに「がんばれ」と励まされるばかり。ふだんの暮らしの中でも、自分が知らないうちに物事が決まってしまうことが多い。「音声の人たちは抽象的な思考ができない」と信じている者もいる。

音声話者だけで気楽に集まりたいと「音声言語のみ」という条件で集会を開いたら、「排他的だ」と宇宙人たちから批判された。そのくせ、テレビでは宇宙人の俳優たちがぎこちない音声言語を発するドラマが人気を集め、それに影響された宇宙人たちの間で音声学習ブームが起き、やがて潮が引くようにブームは去っていく。

コミュニケーションの回路が閉ざされているわけではない。実は、宇宙人はテレパシーで話しているが、身体の機能として音声を発したり聞いたりすることができる。もったいないことに、その機能があるにもかかわらず、音声言語の習得に活用している宇宙人はわずかである。宇宙人たちにとって音声言語は母語ではないから、地球人ほど流暢に音声で話せる人はまれであるが、地球人とともに地道に音声言語を学び、理解をめざそうとする者もいる。しかし、圧倒的に大多数の宇宙人たちは、音声言語を話せない。

地球人は、ふだんは音声言語で暮らしながら、情報がほしい時は音声のできる宇宙人に通訳を頼んだり、助言をもらったりする。音声で暮らしていて不便はないという感覚はあるものの、多くの情報や資源を握っているのは宇宙人なので、仕事でも勉強でも、テレパシーの世界と接しながら暮らすことはある意味で避けられない。

「音声だけの自由な言語世界」と「テレパシーとの接点にある不便で困難な言語世界」。マイノリティの音声話者たちは二つの世界をあわせもち、場面によってふるまい方を使い分けている。しかし、テレパシーだけを話して暮らす宇宙人たちの大部分は、このような音声話者たちの世界についてほとんど知る機会がなく、「テレパシーの不自由な人たち」というくらいの認識でいる。

■宇宙人文化人類学者がやって来た

さて、そんなある日、一人の宇宙人が私たち地球人の家を訪ねてきた。「私は文化人類学者。あなたたちの言語と文化について学びたいのでよろしく」と言う。この人類学者は自分では音声言語を話せず、通訳者として一人の宇宙人を連れてきていた。もっとも、その通訳者という人も音声言語の学習歴わずか1年ということで、こちらが言っていることも時どき理解できていないようだった。

(A氏＝宇宙人文化人類学者、B氏＝対応した地球人市民)

A「【こんにちは、はじめまして】(←ここだけぎこちない音声で)」

B「調査の目的は何ですか」

A(以下は通訳者を通したテレパシー発話)「テレパシーの世界には多くの言語があり、そうしたことばや文化を学ぶのはおもしろく有意義なことです。音声の世界もそういう多様な文化の一つですから、ぜひ調査して世に紹介したい。多くの宇宙人たちがきっと興味を持つでしょう」

B「あなた自身は音声言語を話せないのですか」

A「私は勉強したことはありません。でも、調査では通訳を使うので大丈夫です。私もいつか勉強してみたいとは思っていますが。ところで、私たち宇宙人が音声言語を学ぶのと同じように、あなたがた地球人もテレパシーを学ぶ努力をしたらどうでしょうか。異文化理解というのは双方向の歩み寄りですから」

B「調査はどのように進めるつもりですか」

A「フィールドワークなので、みなさんの音声言語の集まりに参加させてもらい、いろいろ学びたいと思います。それから、この近くにお住まいのCさん(宇宙人)もこのプロジェクトに関心を持っていますので、この方にもインタビューをして、みなさんの歴史や価値観について聞くつもりです。Cさんは、音声言語がたいへんお上手だそうですね」

B「ちょっとだけですけれどね。どうして宇宙人の方に聞くのですか」

A「私は、宇宙人／地球人という差別をしないつもりですから。当事者はもちろん大事ですが、私は『地球人中心主義』というわけではなく、中立的に調査したいので。それに、通訳を通さずテレパシーで話せるCさんは、私にとって取材の上でもありがたいのです」

B「調査したら、それをどうしますか」

A「大学に帰って学会で発表したりするつもりです。できれば私はそれで博士論文をまとめたいと思っています」

B「結果は見せてもらえますか」

A「ええ。学会で発表するので、だれでも聞きに来てくれていいですよ」

B「でもテレパシーだけで行われる学会ですよ。行っても私たちには理解できないのです」

A「じゃあ、発表した後に原稿を送りますよ。そうすれば、会場に来なくてもいいでしょう」

B「調査終了後はどうなるんでしょうか」

A「私は科学者ですから、すぐに支援に結びつけるのではなくて、中立的な立場で研究したいのです。音声話者があわれみのまなざしを受けるのはおかしいと思う。音声言語という異文化世界があり、それを学ぶことは宇宙人たちにとっても楽しいことだというメッセージを伝えたいのです。テレパシーができなくてもいきいきと暮らしている様子を知って、元気をもらう人もいるでしょう。私はこれで

博士号をとり、大学の研究職に就きたいですね。音声言語研究はこれから発展する領域ですから、多くの学生を育成して研究を振興したいと思います」

B「あなたの大学には、地球人は入れるんですか」

A「えーと、差別はしていないから、入れるはずですよ。通訳者？ 通訳が要るんですか、通訳はないですね。テレパシーで話せないと、大学に通うのは厳しいかもね。他の惑星から来た宇宙人たちも、私たちの大学で使われるテレパシー言語を覚えてがんばっていますから。あなたがた地球人も努力したらいいでしょう」

B「あなた、何をしに来たんですか」

A「ですから、異文化研究をして、博士号をとるために」

結局、この宇宙人文化人類学者A氏は、地球人B氏の調査協力を得ることができなかった。音声社会の事情を少し知っている宇宙人C氏とインタビューし、調査拒否の経験もまじえて論文を書いたらしい。テレパシーの世界でそれがどんな評価を受けたのかを知る由もないが、インターネットで見たら「××大学講師」という肩書が付いていたから、「あっちの世界」ではいい評価をされているのかもしれない。気持ちのいい話ではないが、関係ないと言ったら関係ないか、どうせテレパシーの世界でのできごとなのだから。

こうして宇宙人の学术界で著名になったA氏は、音声言語の世界では忘れ去られ、B氏ら直接相手をした一部の地球人にとっては苦々しい思い出をとどめる存在となった。

■宇宙人と地球人の出会いの構造

いかがだろうか。読者のみなさんは、「テレパシー世界の文化的多様性の延長線上」のつもりで音声文化を学びにやってきた宇宙人に対して、快さを覚えるだろうか。テレパシー世界の住人たちを楽しませるために、すすんで調査に協力しようと思うだろうか。この出会いを快く思えないとすれば、それはなぜなのか。

宇宙人文化人類学者A氏は、極端な悪人ではなかったはずである。マイノリティについて学ぶ気があり、マジョリティにおける偏見をただすことに関心があった。また、音声世界の営みを文化として認識しようという姿勢もまちがってはいない。しかし、そのアプローチのしかたが地球人B氏の神経を逆なでする。

まず、A氏はテレパシーのことばで話し続けているが、それだけで本人が意図しないままに十分「縁遠い他者」を演じている結果となっていた。それは地球人にとって理解しようのない世界のことばだからである。また、音声社会に関心を寄せつつも、宇宙人どうしのテレパシーでの調査を好んでいた。調査後のことについても、A氏は気がかりな言動を見せている。調査の成果はテレパシーのことばだけがとびかう学会で報告されるが、音声話者の参加について考慮されておらず、A氏もそのための努力を払うつもりはなさそうである。また、音声言語研究の振興をするという意欲は純粋だとしても、当の地球人たちが大学に行くことは想定されていない。テレパシー世界での自身の出世と学問の発展には寄与するかもしれないが、地球人たちにはまるで成果が還元されず、すべてはどこか遠い世界で行われていることと見られて終わるだろう。

ここで両者を隔てているのは、「ことばの違い（お互いが話している言語が違うこと）」、「立場、権力、

資源の違い（相手が調査する側で、こちらが調査される側と定まっていること）だけではない。そこには「身体の違い」が関わっている。つまり、こちらはどんなにがんばってもテレパシー言語を習得することができないという大前提があり、これが大きな距離感を感じさせ、相手からのさまざまな働きかけがどれもむなしく感じられる。この出会いは、相手がふだんのペースで自然にふるまえばふるまうほど、「あっちの世界」らしさが強調されてしまい、自他の隔絶感が増幅されるという構造をもっている。局所的に見ればことばが異なる対等な二つの文化の出会いに見えるが、全体的な状況を考慮に入ればまったくそうでないことが分かる。

■ろう者研究の「観測問題」

さて、いささか長い寓話を終えて、ろう者と手話言語をめぐる現実の話に戻そう。読者の多くはすでにお気づきかもしれないが、これは現実の音声言語と手話言語の関係、聴者とろう者の関係を戯画的に表わした話である。表現は多少誇張しているものの、そこで語られていることはほぼ現実のことである。

ろう者は、努力しても耳で聞き取ることのできない音声言語に囲まれて暮らしている。自分たちは手話という自由で多様性に満ちた言語をもっているものの、それは一般に言語と見なされていないことが多い。学校や家庭では手話の使用を制約され、音声言語の使用を強いられることがある。ろう者に対する偏見がなくなれば問題が解決するわけではなく、手話を流暢に話せる聴者は少ないし、テレビドラマなどをきっかけに聴者の間で手話ブームが起き、やがてブームは去っていく。こうしたことに不満を覚えたとしても、大多数の聴者はそのようなろう者独自の価値観があることにすら気づいていない。

このようなろう者の世界に対し、手話を学んでいない聴者の文化人類学者が、これまでの音声世界の異文化理解のような感覚のままいきなり訪問することは、まさに「テレパシー宇宙人が地球人の家庭に闖入したのと同じ構造の出会い」が発生することである。

では、聴者はろう文化に対する理解を閉ざせばよいのだろうか。この道を採用すべきではないだろう。なぜなら、それは手話とろう者に対する聴者社会の誤解と偏見を放置することに等しいからである。一つの方法は、ろう者が自らろう者の文化について研究し、発信することであるが、それについては本論の後段で述べる。

聴者が理解を求めてろう者にアプローチしようとしても、「ろう者たちの集まりに入る」という行為自体がろう者の側に混乱を引き起こすきっかけとなることもあり、この「観測問題」は深刻である。それを自覚していなければ、極端な場合、調査者が原因で引き起こされた現象をろう者の特性であると勘違いし、「ろう者は閉鎖的で排他的、調査を望まない傾向にある」などというレポートを書いてしまうかもしれない。だから、ろう者の文化を学ぶためには、ろう者の文化を知ってから調査に入らなければならない。何という困難な課題であろうか。

もっとも、そこで論理的に逡巡を続けていても、コミュニケーションの断絶は埋まらない。失敗を覚悟で手話の世界に入っていった聴者と、そのアプローチにこりずにつき合ってくれたろう者たちの出会いの中から、いくつかの教訓が得られた。以下では、私がろう者との調査で心がけているマナーを四つにまとめてご紹介したい。いずれも、このくらいは原則にしておかないとろう者に相手にもしてもらえないだろうという想定のもとに実践している、最低限のルールである。

- (1) 自分でその土地の手話言語を学び、調査で使うこと
- (2) 調査地ではろう者と緊密な協力関係をもつこと

- (3) ろう者に対して成果を公開すること
- (4) ろう者の言語権について理解を深めること

私の失敗を奇禍として得られたこれら教訓は、両世界を結びつける細い橋となりうるだろうか⁽⁵⁾。

■マナー (1) 自分でその土地の手話言語を学び、調査で使うこと

一点目に「自分でその土地の手話言語を学び、調査で使うこと」である。手話通訳を通してのかがりは、ろう者にとっては言語的に遠い存在であり、手話の世界に飛び込む覚悟がない人だと映るだろう。自分でその土地のろう者の手話を学び、それを話しながら調査をするというのは、ろう者に教えるを請うための最初の入り口となる。

音声言語のフィールドワークにおいても「現地の言語を習得する」という方法論があり、これはことさら特殊な倫理ではないかもしれないが、ろう者の場合はそれがいっそう本質的な重要性をもつ。ろう者の前で音声で話すことは、相手が理解できないのみならず、将来にわたって理解しようのない言語をあげせ続けることであり、相当の不快感を与えていると考えた方がよい。聴者は音声の発話によって自ら壁を作っているということをまず自覚しなければ、ろう者の価値観を学ぶ気のない人だというメッセージを発し続けることになる。

また、手話が話せなければ手話通訳者に頼ることになるが、通訳者が仕事を終えて帰ってしまえば、再びコミュニケーションは断絶状態になる。ろう者の世界をつかの間訪れ、すぐに音声の世界に戻ってしまう言語的に遠い人だという距離感をろう者が感じるのは自然なことであろう。ろう者に学ぼうとする姿勢を表明する最初のあかしとは、時間をかけて手話を自ら話せるようになることにほかならない。

日本聾史学会という学会がある。ろう者の研究者たちが運営しているこの学会の大会使用言語は「日本手話のみ」とされており、講演や発表はもちろん、司会進行も事務手続きも総会も懇親会もすべて手話のみで進められる日本で唯一の学会である。私がかつて手話の初学者であったころ、「手話の語学力が不十分なので、手話通訳者同伴で参加したいがかまわないか」と学会に問い合わせをしたところ、「手話をマスターしてから来てください。初学者でも努力して手話の理解に努めてください」との返事があった。手話言語で完結している場に、ろう者たちが理解できない聴者の音声言語の発話が入ると、それだけで場の雰囲気が変わってしまうので、ひかえていただきたいという説明であった。私はそういった価値観を知らずに問い合わせたことを恥ずかしく思い、その方針に従った。

私はいつもアフリカ諸国の調査地で、ろう者との作業をすべて手話で進めている。インタビューも、日常生活も、調査の打ち合わせも、飲み会も、後で紹介するようなセミナー発表や講演会もである。

また、それはろう者との一対一の会話の場面にとどまらない。たとえばろう者と作業しているときに、通りがかりの第三者の聴者が声でペラペラと話しかけてくることがある。そのときに、何気なく声で返事をしてそのままおしゃべりを続けてしまったら、それはろう者と共有している場を放棄したことになる。そういうときは「ここでは手話で話しているので手話を使ってほしい」あるいは「ちょっと後にしてくれ」と、ろう者の前で声を使った相手をいさめるだけでなく、ろう者にも「今、聴者から声であいさつされたので、後にしてもらったわけ」というふうに手話で説明するようにしている。そうすれば、ろう者と共有しているコミュニケーションの場に差し挟まれた「音声という夾雑物」は取り除かれ、「なんだ、そんなことか (笑)」と、もう一度ふつうの手話の場に戻ることができる。

話しかけてくる聴者の中には、「私は耳が聞こえるから、手話は要らないよ」「声でふつうに話したら

いいよ」と言う人もいるだろう。また、いちいちやりとりをろう者に報告するのは負担だと感じたり、「今のは何？」とろう者に聞かれてめんどろうだと思ったりする人もいるかもしれない。しかし、このような聴者たちの間での個人主義や自己決定をふりかざすことは、こういう場面ではむしろ有害である。手話から音声に発話を切り替えるのは、聴者の私にとっては容易だが、ろう者から見ればそれは「遠いテレパシーの世界に相手がずっと消えてしまうようなもの」である。それで信頼関係に水が差されるリスクを考えれば、ちょっとしたわずらわしさなどどうということはないはずだ。

聞こえる人に何を言われようが、ろう者とともにいるときはがんこに「手話派」を貫き、一瞬音声の世界に出て行っても、必ず手話の世界に帰ってくる人だという安心感をもって見てもらうことが、気兼ねなく共存するためには何よりも大切である。そのくらい徹底して、視覚コミュニケーションの世界をまもる努力を払い続けるのである。

■マナー (2) 調査地ではろう者と緊密な協力関係をもつこと

二点目に「調査地ではろう者と緊密な協力関係をもつこと」である。同じ土地の人たちでも、ろう者と聴者では価値観、世界観、歴史観がまるで異なっているのが普通である。聞こえる人との関係作りも重要だが、私はろう者との関係を優先的に築くようにしている。それが手話を通じた信頼関係構築の上で欠かせないし、より正確で緻密な文化理解にもつながるからである。

アフリカのD国で、ろう教育の現状調査を計画したときのことである。ろう学校の教員をしている聴者のE氏を研究協力者と位置づけ、E氏と私の名前が記された調査関係書類をつくった。ところが、そのことが現地のろう者たちをひどく立腹させてしまった。

「なぜ相談もなく聴者と研究を進めるのだ！ ろう者のことはろう者とやりなさい」

もちろん私はおわびしたが、なぜそれがかくも深刻な問題なのか、最初は理解できなかった。E氏もろう教育の一角を担っている教育者で、手話も話せる人である。調査の自由を制約される窮屈さすら感じたものだった。

しかし、事情をいろいろと聞いてみると、次第に背景が見えてきた。E氏はその国のろう者団体とは協力関係になく、海外の援助機関の聴者たちとの連携を深めている人物だった。また、彼が用いる手話は外国の手話であり、その土地のろう者が話す手話ではなかった。こうしたことから、ろう者たちの間ではあまりよい評価をされていないということが分かってきた。そういう事情も知らないままにこの人だけとの共同研究が進んでしまったら、この地域のろう者に関するとんでもない誤解が広まるおそれがある。そういうろう者たちの危惧が「なぜ聴者と！」というお説教として飛び出したのだ。

そのできごとを経験してから、私は原則として現地のろう者やろう者団体を研究協力者とし、調査方法についてアドバイスをもらいながら研究を進めることにしている。後にE氏ともインタビューをする機会があったが、この人物に会うということについては事前にろう者たちに話し、結果を手話で説明し、ろう者たちの意見を聞きながらまとめるということをするようにした。こうした情報の収集と共有をくりかえしていると、その往復運動自体がろう者の価値観や歴史観をうかがい知るための最良の手段だと気づいた。つまり、私にとってろう者の注意とは、調査における自由の侵害や束縛となったのではなく、ろう者の目から見た社会事象のイメージを学ぶためのまたとない調査手法の一環となったのである。

■マナー (3) ろう者に対して成果を公開すること

三点目に「ろう者に対して成果を公開すること」である。手話の世界で学んだことを耳の聞こえる人たちの間だけで用いるとしたら、成果のもち逃げと見られても仕方ないだろう。最近私は調査に行くたびに、現地のろう者団体とセミナーを開いている。手話で講演や研究発表をさせてもらい、ろう者たちの率直な意見をもらうことで、信頼関係作りと研究の質の向上をあわせてすることができる。ここでも、手話通訳を通さずに自分が手話で発表することが望ましいだろう。

これは、前節で述べたろう者との相談や助言をさらに大がかりにしたものである。現地の手話を覚え、信頼関係ができてきたとしても、いったいどんなことが明らかになり、どのような成果が報告されることになるのかは、調査者のみが知っていることである。ここで強く関わってくるのが、聴者社会における根強い誤解と偏見の存在である。

手話は言語ではない、手話は世界共通の具象的なみぶりである、ろう者は抽象的思考能力が低い、ろう者は閉鎖的、こういった根拠のない誤解と偏見が聴者社会には根強く存在している。しかも、こうした言説は音声言語の世界の中で流布しており、ろう者が直接それを確かめに行くことが難しく、言語が違うので反論もしづらい。こうして誤解は温存されるばかりか、ときには研究によって増幅されることすらある。聴者の研究者がどんなことを学んだかを知りたいというのは、ろう者として自然な欲求であるにちがいない。

このような発想から、アフリカのF国で調査していたとき、私はろう者団体と定期的にセミナーを開くことにした。ちなみに当初は、私は音声言語（フランス語）で発表し、現地の手話通訳者に通訳を頼んでいた。しかし、ろう者たちの反応はかんばしくなく、質問もあまり出ないような状況だった。何か月かたち、現地の手話でインタビューできるほどにスキルアップしたとき、私は思い切って手話通訳を断り、自分の手話で発表することにした。参加したろう者たちの反応はぜんぜん違っており、雑談や冗談もふんだんにまぎった発言が相次いだ。同じことばを共有するとはこういうことなのだと実感した。一つ目のマナーにも関わるが、自らが手話を覚えて直接ろう者に成果を開示することの重要さを、身をもって理解したのである。

後日、アフリカの別の国G国で、大都市のろう者の教会から依頼を受け、150人を超えるろう者たちが集まる大ホールで講演をしたことがある。1時間を超える講演の間、私は一言も口で発声せず、すべてを手話で語ったのだが、参加者は食い入るように私の手話での語りを見つめ、笑い、盛況のうちに講演会は終わった。もし口でペラペラと「ろう者たちに届かない遠い世界のことば」を話していたら、いかに手話通訳者を通して情報伝達できていたとしても、このような直接的な語りかけはできないし、ろう者たちの盛り上がりもこれほどは期待できなかったことだろう。

ろう者に対する成果の公開は、イベント開催にとどまらない。アフリカのH国で調査をしていたとき、国際会議で調査結果を発表するというアイデアについて相談したところ、ろう者たちが「私たちの国のろう者のことは自分たちで発表する」と言い始めた。それまで調査にはげんできた私には、いささかショックな発言でもあった。現地のろう者が研究をしたら、遠くから来たよそ者である私が勝てるはずがない。しかし、考えてみれば、そもそも研究者が成果の発表を独占する権限をもつわけではないのだ、という当たり前のことに気づいた。また、現地の事情に詳しいろう者たちが地域密着で調査を行うとしても、国際比較や広域的情報収集、理論的検討など、身軽な外部者のフィールドワーカーだからこそできる種類の研究もある。地域生活者の視点と外部者の視点で得た情報を交換し合うというよう

な生産的な分業も考えられることだろう。そういうことを念頭に、アフリカのI国では、ろう教育関連文献資料の収集・保存プロジェクトなど、長期的な共同研究の検討が始まっている。つまりこのマナーは、世界各地のろう者を「インフォーマント」ではなく「共同研究者」ととらえるような協力関係の構築へと私たちを誘うことだろう。

■マナー（4） ろう者の言語権について理解を深めること

四点目に「ろう者の言語権について理解を深めること」である。研究者が中立の立場で調査を進めることがあってもよいだろうが、長期的には成果がその地域における手話言語の認知やろう者の言語権擁護に貢献するような展望をあわせもっておきたい。

アフリカの諸都市でろう者たちとフィールドワークをしていると、やはり「最終的に君は何のために調査するのか」ということを口ぐちに（手に手に）問われることになる。アフリカのJ国でろう者団体主催の講演会を行った時のこと。質問で「研究だけで終わっていいと思うか。支援にはつながらないのか。研究だけしたって読み捨てる人が多いでしょう」という発言が寄せられた。人類学者にとって、核心をずばり突いた厳しい指摘である。私は「言語と文化の実態を明らかにすることで、聴者がろう者を正しく理解できるようにする。そのことが、ろう者への正しい支援につながるはずだ」という趣旨のことを答えた。

たとえば、これまで世界各地で、ろう者の手話を禁止して厳しい音声言語訓練を課す過酷なろう教育が行われたが、それも聴者の教育者や親がろう者のためによかれと思ってしていたことである。その方法が適切な支援でないということを聴者が学ばないかぎり、「開発支援」「教育支援」という名の下に、手話の自由が奪われるような歴史が繰り返されるだろう。聴者が独断で支援方法を決めてしまう前に正しく理解してもらうことが先決なので、そのために必要な調査を行い、ろう者の言語と文化に対する尊重の姿勢を養うことをしたい。このように答えたら、ろう者たちは「そのとおりだ!」と納得してくれた。

これは調査の口実というわけではなく、ろう者の研究を続けたいと思う私の動機の主要な部分を占めている。もしも政策や教育が変わり、聴者たちが正しくろう者の実態を学ぶ姿勢が培われたなら、私の研究の目的は達せられたと思うし、そのあかつきには私は調査テーマを変えてもかまわないと思っている。それが実現しないかぎり、ろう者がその真意をマジョリティに向けて発信する手伝いとして、私も調査を続けるだろう。

言語学、文化人類学、教育学、心理学、生物科学、情報科学…。ろう者と手話言語に関わる研究領域は、裾野を広げている。いずれの領域の研究者も、ろう者が厳しい言語的弾圧を受けた歴史を持ち、今日もなお排除されやすい言語集団であることについて十分学び、マイノリティの社会的地位向上と言語権保障に貢献する姿勢を培っておきたい⁽⁶⁾。「音声の世界で何か勝手にやっているらしいけれども、ろう者には関係ないし、いいことは一つもない」などと冷ややかに見られないために。

■ろう者にとって「理解可能な他者」であるために

ここでご紹介した四つのマナーを一言でまとめれば、「手話言語集団の中に軸足を置いて仕事をする」と言うことである。なじんでしまえば当たり前のことにもなるのだが、すでにご紹介した通り、調査を

始めた頃はずいぶんとふみ外し、ろう者たちにしかられた。幸いだったのは、そういう時にストレートに「そんなやり方はだめだ！」と注意してくれたろう者たちに恵まれたことである。こうした率直なアドバイスで、ずいぶんときたえてもらった。

これらマナーを守ることは、耳の聞こえる研究者が「ろう者のふりをする事」ではない⁽⁷⁾。あくまで耳が聞こえ、音声言語の情報が飛び込んでくる身体をもっている聴者は、基本的にその立場を捨てることはできない。そうでありながらも、ろう者の会話場における中立的なルールをわきまえ、その場を乱さないように慎重にふるまおうと努めることはできるはずである。

逆に、これら四つを守れば調査倫理として十分かということについては、現在のところ私が断言することはできない。この四つとは、ろう者の世界から見て「迷惑で縁遠い他者」でなく、せめて「無害で放っておける他者」であるための必要条件である。それをふまえた上で通常の調査研究が始まるのだから、これはいわば出発点である。

ただ、次の二点を指摘しておきたい。一点目として、これは地域によらず、ろう者と共同作業する際にはおおむねどこでも通用するであろう普遍的な倫理であると思われる。私の場合は、まず日本手話の勉強を始め、やがてアフリカ 5 カ国でのフィールドワークを行い、アメリカやアジア諸国でのろう者との出会いも経験した。初学者の頃に日本で叩き込まれたろう者とのつき合い方のルールをもってアフリカやその他の地域のろう者に会ったところ、それは快適なこととして歓迎された。

二点目として、これらの原則をかたくなに守っていると、時どきろう者だともちがわれたり、どうして耳が聞こえるのにそういうことができるの？と問われたりするくらいに、ろう者の集まりに溶け込んでしまえるという幸福な経験をすることがある。先ほどご紹介したG国でのろう者の教会での講演の後、教会を運営するろう者の方K氏からこのように言われた。

K「あなた、ろう者に生まれればよかったわね」

私「ありがとう。神様が決めたんでしょね」

K「そうね。神様があなたを『聞こえる世界 (hearing world)』にもたらされたのね」

ろう者のことが分かりたいと思い始めてから10年。とにかく手話を学び、失敗から得た教訓をがんこに守ってきただけでそこまで歓迎されるとは、まったく恐縮に値することで、鳥肌の立つような感銘を受けた。

もっとも視点を変えれば、そういう見方になるほどに、ろう者たちは世界のどこにあっても茫洋たる「理解不能なことば」に囲まれ、しかも「迷惑で縁遠い他者」に出会い続けてきたのだとも言える。それはそれでいささか悲しい現実でもある。しかし、異文化理解を旨とする人類学者が身をもってその中にとびこみ、理解の回路を開くことをめざそうとするのであれば、このがんこさはとりえでもあるだろう。ろう者と同一になることはできないが、せめてろう者から見て「迷惑でない、理解可能な他者」であろうとするために払える努力はあるはずである。

四つのマナーは、一つずつ見てみれば、何も特別なことではないと見受けられるかもしれない。通常の音声言語文化に関する人類学的調査でも、そのようなことを行い、調査者とインフォーマントの関係を対等に近づけようと努力してきた先人は多いにちがいない。ただしろう者の場合は、これらマナーが「対等に近づくための努力目標」なのではなく、「これらを欠かしたら出会いそれ自体が壊れてしまうほど本質的で不可欠な前提」であるということを強調しておきたい。その理由は、ろう者と聴者は同じ身体感覚を共有していないからである。

19世紀に生まれた人類学は、言語・文化の違いを越えることに挑み、ついで20世紀には権力・資源の

偏在を解消することにも挑んできた。次に私たちが挑むべきは、身体条件の異なる他者との対話である。異文化理解という大きな目的に変わりはないものの、方法・倫理上の特段の工夫が求められる。その実例が、このろう者研究の倫理であった。

■ろう者の人類学者がもつ可能性

最後に、比較の意味も込めて、「ろう者が人類学者となって他地域のろう者の調査をする」というケースを考えてみよう。実際、アメリカではすでにこのような人類学者が幾人も活躍している⁽⁸⁾。

もちろん手話は世界共通ではなく地域によって異なる言語なので、ろう者の人類学者もフィールドで一から現地の手話言語を学ぶ必要がある。ただし、耳が聞こえない人であり、別の手話を第一言語としてもっているろう者は、少なくとも身体感覚をインフォーマントと共有しているので、「会話の途中でとつぜん手話の世界の外へと消えてしまう」ことや「成果をろう者の手の届かない所だけで用いる」ことは起こりようがない。同じろう者だから完全に分かり合えるという保障はないものの、この場合は聴者の人類学者が聴者のインフォーマントとともにやってきた通常的人类学的倫理を適用することができる。聞こえる研究者がろう文化の中に入って無用な混乱を引き起こすよりも、はるかに倫理的なギャップは少ないものと思われる。

テレパシーの話者がテレパシーで調査する。音声の話者が音声で調査する。手話の話者が手話で調査する。このような身体感覚と伝達モードを共有する調査者—インフォーマント関係であれば、これまで同様のフィールドワークの方法と倫理が用いられるだろうが、それを越境しようとする場合には、身体の違いを自覚し、そのギャップを埋める努力を調査者が意識的に引き受ける必要があるのは当然のことであろう。それが容易でないことを覚悟のうえで行うかどうか、である。

■おわりに: 「文化の多様性」の落とし穴

世界には多くの音声言語と多くの手話言語が分布し、それぞれに関わりの深い諸文化が生まれている。これらの営みは、総じて確かに「文化の多様性」と称することができる。しかし、ひっくり返って「文化の多様性」と形容することには、実は落とし穴もある。このように並列することで、それぞれの文化を成り立たせている背景にひそむ「身体の差異」の問題が後景に追いやられ、聴者のフィールドワーカーが通常的人类学の方法と倫理を用いればよいものと思ひ込み、世界各地のろう者コミュニティに混乱と迷惑を及ぼすことがありうるからである。

それゆえ、私は今後のこの領域の研究振興のために、あらかじめ提唱しておきたいことがある。聴者の研究者は、ろう文化の中に入る前にあの宇宙人類学者の姿を思い起こすことを勧めたい。やればできるのに音声言語を学ぶ気がなく、音声話者と協働せず、成果を還元するつもりがなく、遠いテレパシーの世界からつかの間やって来てやがてその世界へと消えていく宇宙人の姿。これが、ろう者の集まりに入る前の聴者の姿である。

もしもあなたの家に、テレパシーしか話さない宇宙人が調査にやって来たとき、ホストファミリーとなってステイさせますか。インタビューの時間をさきますか。情報を提供しますか。音声の世界をあれこれとガイドしてあげますか。この人を音声社会の調査者として気持ちよく受け入れるためには、まずどんな姿勢を求めますか。

このイメージトレーニングは、聴者の研究者がろう者のインフォーマントと向き合う時の方法と倫理を吟味する際のまたとない「鏡」となるにちがいない。

謝 辞

本論は、世界各地（日本、カメルーン、ガボン、ベナン、ガーナ、ナイジェリア、アメリカ、フランス、韓国、ミャンマー）のろう者たちとの出会いの中で学んだことをまとめたものです。「ただの聞こえる人」であった私に対し、辛抱強く注意と助言をくださったすべてのろう者のみなさまにお礼を申し上げます。

注

- (1) たとえば、現代思想編集部編（1996）など。
- (2) アフリカ諸国のろう者に関する調査の詳細は、亀井（2006a）などをご参照いただきたい。
- (3) 手話言語とろう者の文化については、すでに数多くの書物が出ている（グロース 1991; サックス 1996; ウィルコックス編 2001; パッデン・ハンフリーズ 2003）。
- (4) テレバシーの国の寓話は別の機会に紹介したことがあり（秋山・亀井 2004）、ここでは調査倫理について検討するために大幅な加筆を行っている。
- (5) この四つの倫理についてはごく短く言及したことがあり（亀井 2006a）、ここではその背景をエピソードとともに詳述している。
- (6) ろう者が社会生活において手話言語を用いる権利（ろう者の言語権）が近年注目を集めている。詳細は亀井（2004）をご参照いただきたい。
- (7) 手話を話せる聴者がろう者のふりやまねをすることについては、その問題点を論じたことがある（秋山・亀井 2004）。
- (8) アメリカ人類学会におけるろう者の人類学者らの発表については、別の機会に紹介した（亀井 2006b）。

文献

- 秋山なみ・亀井伸孝. 2004. 『手話でいこう: ろう者の言い分 聴者のホンネ』 京都: ミネルヴァ書房.
- ウィルコックス, シャーマン編. 2001. 鈴木清史・太田憲男・酒井信雄訳『アメリカのろう文化』 東京: 明石書店.
- 亀井伸孝. 2004. 「言語と幸せ: 言語権が内包すべき三つの基本的要件」『先端社会研究』(関西学院大学21世紀COEプログラム) 1: 131-157.
- 亀井伸孝. 2006a. 『アフリカのろう者と手話の歴史: A・J・フォスターの「王国」を訪ねて』 東京: 明石書店.
- 亀井伸孝. 2006b. 「世界の危機言語: アメリカ人類学会第104回年次大会分科会報告」『手話コミュニケーション研究』(日本手話研究所) 59 (2006.3): 62-69.
- グロース, ノーラ E. 1991. 佐野正信訳『みんなが手話で話した島』 東京: 築地書館.
- 現代思想編集部編. 1996. 『現代思想 (総特集 ろう文化)』 24-5. 東京: 青土社.
- サックス, オリバー. 1996. 佐野正信訳『手話の世界へ』 東京: 晶文社.
- パッデン, キャロル・トム・ハンフリーズ. 2003. 森杜也・森垂美訳『「ろう文化」案内』 東京: 晶文社.